

# 社報 御霊本宮

第69号

発行者

御霊神社本宮  
宮司 藤井利夫  
五條市霊安寺町  
0747-23-0178

発行日

令和3年  
1月1日

## 他戸親王 生誕一二六〇年



令和三年は、他戸親王がお生まれになつて千二百六十年になります。

他戸親王は、光仁天皇と井上皇后の間に生まれた御子で、皇太子でありました。国史には生誕年は記録されていませんが、鎌倉時代に成立したと推定されている水鏡の宝亀三年（七七二）には次のような記述があります。

「井上后の子の他戸親王は光仁天皇の第四皇子で、年もまだ幼くて、この年十二歳」

この頃の年齢は数え年ですので、満十一歳として逆算すると、西暦七六一一年、天平宝字五年生まれとなります。宇智郡（五條市）に来たときは十三歳、亡くなったのは十五歳でした。

千二百六十年を十二年で割ると、ちょうど割り切れます。つまり、他戸親王は丑年生まれの「年男」になります。

当時は「丑年生まれ」などという生誕年を干支で示す風習はなかったと思いますが、生誕千二百六十年と、二十一回目の還暦を言祝ぎたいと思います。そして、年男のパワーをいただきます。きましょう。

### 丑年はどんな年？

「丑」は中国で生まれた漢字で、本来の意味は「からむ」という意味があり、芽が種子の中で伸びることができない状態を表しているそうです。これを後に覚えやすくするために「牛」の

意味が与えられました。

「牛」は古くから食牛や乳牛、耕牛と呼ばれ酪農や農業で人々を助けてくれる存在として重要な生き物でした。大変な農業を地道に最後まで手伝つてくれる様子から、丑年は「我慢（耐える）」や「発展の前振れ（芽が出る）」を表す年になると言われています。

過去の丑年の出来事を振り返ってみると次のようなことがあります。

一九六一年は「NHK朝の連続テレビ小説の放送が開始されました。一九七三年は「オイルショック」があり、一九八五年には「ファミコンソフト「スーパーマリオブラザーズ」が発売されました。一九九七年には消費税が5%へ引き上げられ、世界初となる量産型ハイブリット車「トヨタ・プリウス」が発売されました。二〇〇九年には選挙による初めての「政権交代」や「裁判員制度」が開始されるなど、今までにない新しいことが始まった年が多いのも特徴です。

### 恵美須神社例祭

### 初戎祭のご案内

五條町の恵美

須神社では、商売繁盛・福德招来・五穀豊穰などを祈願する初戎祭を斎行します。



毎年一月九日、十日、十一日に行われ、十日が本戎のため十日戎とも呼ばれます。境内は福俵や熊手などの縁起物（吉兆）を求める人たちが賑わいます。日程は次の通りです。（変更される場合もあります。）

○一月 九日（土）宵戎  
宵戎祭 午前九時

吉兆頒布 午後八時頃まで

○一月 十日（日）本戎  
例祭 午前九時

吉兆頒布 午後八時頃まで  
○一月十一日（月）残り戎  
吉兆頒布 午前十一時頃まで

# 奇祭 オビシヤ

関東地方で一月から二月にかけて各神社で行われる神事に「オビシヤ」があります。オビシヤは「御奉射」「御備射」「御歩射」などの漢字があてられ、一説では、馬に乗って矢を射る流鏑馬・騎射に対して、馬に乗らない「歩射」であると考えられています。

白い紙に同心円を描いた一般的なものもありますが、「鬼」の字を書いた的や、「三本足の鳥(八咫鳥)」を描いた的も多くあります。古来、中国や朝鮮半島、日本では、三本足の鳥は太陽を象徴する動物として描かれてきました。このため、オビシヤは、「日射」すなわち象徴的に太陽を射て、新たな年の活性化を図ったり、豊作を祈ったりする行事であったのではないかと、とる考え方もあります。

中国では、漢の時代に殷の頃から伝わる伝説として「十日神話」が成立します。太古、太陽は十個あり、交替で

空に昇っていたのが、あるとき一度に十個の太陽が昇りました。世界は焦熱地獄と化し、川が涸れ、稲も枯れてしまいました。そこで帝は世界を救うため、弓矢の名手を呼び九つの太陽を射落とした、という内容です。

オビシヤ神事のいくつかは、賀茂氏系の神社で執り行われます。賀茂氏系ではない神社でも行われるのですが、それらの神社も実は物部の神(スサノヲ、コトシロヌシ、ニギハヤヒ、フツヌシ、タケミナカタなど)を祭っています。賀茂氏もまた物部一族なのです。

物部氏は神道系をつかさどり、古代日本では祭祀と軍事を握る最も力のある豪族でした。けれども仏教系の蘇我氏との戦いに敗れ、藤原氏に祭祀権・軍事権を奪われ凋落・衰亡しました。その敵である藤原氏側に取り込まれた物部一族の一氏族が賀茂氏です。

物部氏一族を十日神話の十の太陽八咫鳥とするならば、賀茂氏はその中で射落とされずにたった一羽残った八

咫鳥である、といえます。

八咫鳥の生き残りである賀茂氏は、日本にも当然伝わっていた射日神話を、ひそかに神事として伝えていくことにしたのかもしれませんが。

関東、特に千葉県でオビシヤ神事が多く行われているのは、「十日神話」に似た伝説が房総半島にあり、物部氏や賀茂氏がこの地に積極的に関与していたということからも、この神事が受け継がれてきたと考えられています。



八百万の神々

- 奥疎神 おくさろのかみ
- 奥津那芸佐毗古神 おくつなきさびこのかみ
- 奥津甲斐弁羅神 おくつかいべらのかみ
- 辺疎神 へつかろのかみ
- 辺津那芸佐毗古神 へつなきさびこのかみ
- 辺津甲斐弁羅神 へつかいべらのかみ

伊耶那岐神の禊において、投げ捨てた左手の手纏たまきからは「奥」を冠する三神が、右手の手纏からは「辺」を冠する三神が成りました。「奥」は沖の意で、海辺を意味する「辺」に対しています。サカルは「放る」「離る」の意で、遠くの意とし、浜辺を意味するナギサ、境界を意味するカイベラに対して、遠くへ離れた所の意とされます。手纏わたづみから海神が生まれたのは、手纏は真珠や貝殻で作るものであるため、海を連想することからという説があります。

万葉集にも「……玉の浦に船を留めて浜辺より浦磯を見つつ……海神の手巻の玉を家づとに……」と、手纏が海神にまつわるものとして詠まれています。

季節のうつろい 最終回

# 七十二候 冬編(下)

五日ごとの季節を表わす七十二候。今月は冬編の第三回目で、現在の暦の一月に関するものを紹介します。

**雪下出麦** 一月一日頃

雪の下で麦が芽をだす頃。浮き上がった芽を踏む「麦踏み」は日本独特の風習です。

**芹乃菜** 一月五日頃

芹が盛んに育つ頃。春の七草のひとつで、七日の七草粥に入れて食べられます。



**水泉動** 一月十日頃

地中で凍っていた泉が動き始める頃。かすかなあたたかさを愛おしく感じる時期です。

**雉始雛** 一月十五日頃

雉が鳴き始める頃。雄がケンケンと甲高い声をあげて求愛します。



**款冬華** 一月二十日頃

雪の下からフキノトウが顔をだす頃。香りが強くほろ苦いフキノトウは早春の味です。



**水沢腹堅** 一月二十五日頃

沢に厚い氷が張りつめる頃。沢に流れる水さえも凍る厳冬ならではの風景です。

**鶏始乳** 一月三十日頃

鶏が鳥屋に入って卵を産み始める頃。本来、鶏は冬には産卵せず、春が近づくと卵を産みました。

〔社務日誌〕十二月

一日 月次祭 社報発行

二日 元興寺文化財研究所・服部氏来社 元徳三年(一三三三

一)の起請文木札を調査

十三日 良峯八幡神社新嘗祭

熊野神社例祭

猿田彦神社例祭会議

二十一日 冬至 袖湯用の神袖を社頭配布しました。

二十九日 餅つき 二十九の二は「ふ」 「九は「く」で、この日に

つく餅は「ふくもち(福餅) と言います。

三十一日 年越大祓・除夜祭



そろそろ  
終息しても  
いいコロナ

昨年は寝ても覚めてもコロナ一色の年でした。

一昨年の十二月、中国武漢でのコロナ騒動を他国のことと安心していただけ、一月になって国内で感染者が出ると、二月にはダイヤモンドプリンセス号で大騒ぎとなり、三月から突然の学校休校、休業要請、外出自粛などが実施され大混乱となりました。

当社では春の大祭・太々神楽祭でも中止、秋祭りの大神輿の出御も中止となりました。

十一月の第三波では、五條市内でも感染者が出始めました。一日も早い終息を願うばかりです。ワクチン接種の話もありますが、変異種が確認され、まだまだ続くコロナ過です。油断大敵。マスク着用、手指の消毒、うがい  
は引き続きやっていきましょう。

Instagram @goryohongu



#御霊本宮 #goryohongu を付けて投稿してください。

公式ホームページ

<http://goryojinja.or.jp>

Twitter @goryohongu





日本書紀にみる

# 十代 崇神天皇 (二)

この日、活日は御酒を天皇に奉り歌を詠んでいうのに、「この神酒は私の造った神酒ではありません。倭の国をお造りになった大物主神が醸成された神酒です。幾世までも久しく栄えよ、栄えよ。」このように歌って神の宮で宴を催しました。宴が終り、諸大夫が歌いました。「一晩中酒宴をして、三輪の社殿の朝開く戸口を通って帰って行こう。」天皇も歌いました。「一晩中酒宴をして、三輪の社殿の朝の戸を押し開こう。三輪の戸を。」そして神の宮の戸を開いて外に出ました。

九年春三月十五日、天皇の夢の中に、神が現れて教えて言われました。「赤の楯を八枚、赤の矛を八本で、墨坂の神を祀りなさい。また黒の楯を八枚、黒の矛を八本で、大坂の神を祀りなさい」

四月十六日、夢の教えのままに墨坂

神と大坂神を祀りました。

十年秋七月二十四日、多くの卿に詔して、「民を導く根本は教化にある。今、神々をお祀りして、災害はすべてなくなった。けれども遠国の人々は、まだ王化に預かっていない。そこで卿たちを四方に遣わして、我が教化を広めたい」と言いました。

九月九日、大彦命を北陸道に、武淳川別を東海道に、吉備津彦を西海道に、丹波道主命を丹波に遣わしました。そして詔して、「もし教えに従わない者があれば兵を以て討て」と言いました。それぞれ印綬を授かって將軍となりました。

二十七日、大彦命は和珥の坂に着きました。時に、少女が歌いました。「御間城入彦(崇神天皇)よ。あなたを殺そうと、その時を窺っていることを知らないで、若い娘と遊んでいるよ。」大彦命はこれを怪しんで、少女に尋ねました。「お前が言っていることは何のことか」少女は答えました。「言

っているのではなく、ただ歌っているのです」またその歌を歌うと、急に姿が見えなくなりました。大彦は引き返して、その仔細を報告しました。天皇の姑である倭迹迹日百襲姫命は聡明で、よく物事を予知しました。その歌に不吉な前兆を感じられ、天皇に、「これは武埴安彦(孝元天皇の皇子)が謀反を企てている兆候である。聞くところによると、武埴安彦の妻である吾田媛がこっそりきて、倭の香具山の土をとって、頒巾(女性が襟から肩にかける布)の端に包んで呪言をして、『これは倭の国のかわりの土』と言って帰ったという。これできつ分った。速やかに備えなくては、きつと遅れをとるだろう」と言いました。そこで諸將を集めて議論しました。

幾時もせぬうちに、武埴安彦と妻の吾田媛が、軍を率いてやってきました。それぞれ道を分けて、夫は山背より妻は大坂から共に京を襲おうとしていました。(次号につづく)

万葉の花たち

## ゆづるは(ユズリハ)

いにしへに ふる鳥かも 弓葉の御井の上より 鳴き渡り行く

弓削皇子(巻二・一一一)

「昔を恋い焦がれている鳥なのか。ユズリハが茂る泉の上を鳴きながら渡っていく」



弓削皇子は天武天皇の御子で、父の恋人であった額田王に贈った歌です。天武天皇が亡くなり、老境に近い額田王に気配りをした歌といわれています。

ユズリハの名は、春に若葉が出たあと、前年の葉がそれに譲るように落葉することから付けられています。その様子を、親が子を育てて家が代々続いていくように見立てられることから縁起物とされ、正月の飾りや庭木に使われます。